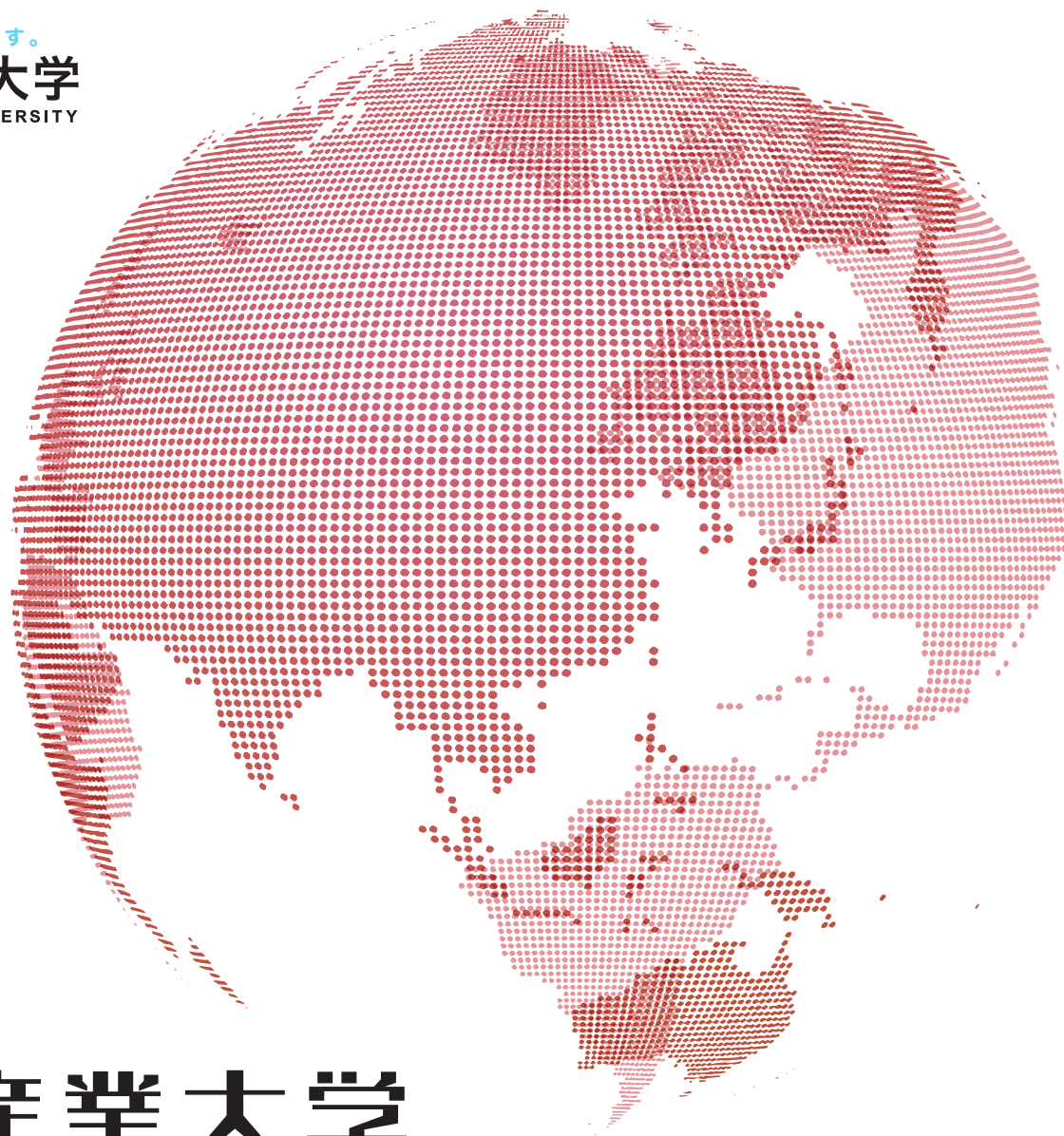




京都産業大学 世界問題研究所 ニュースレター

2026. 9 Vol.18

NEWS LETTER

CONTENTS

特集

2025 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

2

所長挨拶・来賓挨拶

4

講評

6

若泉敬記念基金について

11

【特集】

2025 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

京都産業大学世界問題研究所主催の 2025 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式が、2026 年 3 月 11 日（水）にオンラインで開催されました。世界問題研究所の所員や関係者、懸賞論文の入賞者など 11 名が参加しました。

「若泉敬記念基金」懸賞論文は、長年にわたって世界問題研究所所長を務めた故 若泉敬教授の寄付をもとに設置された「若泉敬記念基金」の活動の一環として実施されています。本学

の学生を対象に「今日の世界問題に関するテーマを各自で設定し、副題をつけて論じる」という趣旨で論文を募集したところ、第 23 回目にあたる本年度は 13 篇の応募作があり、二席 2 篇・佳作 5 篇の計 7 篇が入賞しました（一席は該当者なし）。

表彰式では世界問題研究所所員の耳野健二現代社会学部教授が司会進行を務めるなか、まずは所長の岩本誠吾法学部客員教授から所長挨拶がありました。挨拶では、「今日の世界問題について」という幅広い主題を設けて数

2025 年度 世界問題研究所「若泉敬記念基金」懸賞論文 入選者

（区分ごとに氏名の 50 音順）

二 席	
杉本 芙優さん （国際関係学部・3 年次）	「再生可能エネルギー普及・拡大をめぐるエネルギー不正義： メガソーラーをめぐる地域係争を事例に」
松井 健太さん （文化学部・2 年次）	「マリア・モンテッソーリの平和論 ーリソルジメント民主派の思想とカトリック信仰との関係を中心にー」
佳 作	
黒川 大和さん （国際関係学部・4 年次）	「ドイツにおける産業デジタル化政策の展開」
小嶋 智廣さん （法学部・3 年次）	「ロシア制裁回避防止をめぐる国際法解釈と政策的対応 ——データサイエンスによる実証的分析を用いて——」
清水 佳穂さん （国際関係学部・4 年次）	「EU における人の自由移動とフィンランドの労働市場 ～国際移動の枠組みとその経済・社会的影響に関する分析～」
杉 旺城さん （国際関係学部・4 年次）	「ポピュリズムはいかにして生み出されるのか ー質的比較分析を用いた十分条件の検証ー」
軒端 来実さん （国際関係学部・4 年次）	「中国の気候変動対策におけるサステナビリティ戦略の考察」

※一席の該当者なし

多くの論文を募り優秀作には奨学金を授与することで学業増進の励みにしてもらうのが懸賞論文の目的であることや、若泉先生の「心田を耕す」という言葉が紹介されました。その上で、AIが人間並みに文章を作ることができる時代だからこそ、自分で読み、考える、書くことの意義についてかみしめてほしいとのお話がありました。そして、岩本所長から入賞者一人一人に賞状が授与されました。

その後、入賞作の講評に移りました。まず岩本所長から「多くの学部から応募がありました。また、2年次から4年次まで幅広い学年からの応募がありました。2年連続で応募された学生さんも2人もいらっしゃいます。主催者側として、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います」「13篇は、着眼点、論文構成、分析方法など、いずれも学術的レベルの高い論文でありました。そのため、甲乙付け難かったですが、審査の結果、二席に2篇、佳作に5篇が選ばれました」「生成AIはあくまで情報収集の補助手段として活用するのは

良いと思いますが、それを鵜呑みにしないで、必ず自分で原典に当たって再度それを確かめる必要があります。そうでないと、若泉敬先生のおっしゃる自分で『読み、書き、考える』ことにはなりません」との講評がありました。

つづいて、二席の2篇について、所員の耳野健二現代社会学部教授から、論文の内容の紹介とともに、どのような点が高い評価を得たのかについての詳しい講評がありました。また、佳作の5篇については、所員の中井歩法学部教授から、優れた点とさらなる研鑽を期待する点について、個別に講評が行われました。

その後、世界問題研究会 INC（インターネットクラブ）会長の澤野勝彦氏から祝辞が披露されました。祝辞では、「近年は帝国主義の再来と思われる弱肉強食の世界と化し、地政学的リスクが増大して先の見えない状況となっています。今回入賞された皆さんは、そんな意識を持たれ、いろいろな課題や種々の問題に鋭意チャレンジ・入賞されました。是非とも若泉敬先生の志と京都産業大学の神山スピ



リットとを高く掲げ、今後の人生に果敢に挑戦していただきたいと思います」とのメッセージをいただきました。

最後に、入賞者一人一人から執筆時の苦労や受賞の喜びなどが語られました。入賞者からは「はじめての本格的な論文執筆だったが、試行錯誤しながら書き進めることで多くのことを学ぶことができた。入賞を励みにこれからも学びを深めていきたい」「現在進行形の事案を対象にしていたので、データの収集においても苦労をした」「研究として新規性を出すために分析手法を勉強することからはじめて、実際に研究に応用したというプロセスでは楽しく取り組むことができた」「今回いただいた講評をもとに今後活かしていきたい」「来年度進学する大学院では、さらに研究を深めたい」といった声などが、寄せられました。

所長挨拶

令和7年度第23回「若泉敬記念基金」懸賞論文授賞式の開催に当たり、懸賞論文の趣旨を簡単に説明し、学生の皆さんに受賞の意義・意味について再確認していただきたいと思います。

この懸賞論文の趣旨は、二つあります。一つは、どの学部生・院生の皆さんからでも懸賞論文に応募ができるように、「今日の世界問題について」という幅広い主題を設けて数多くの論文を募り、その応募作の中から優秀作を選考し奨学金を授与することで、応募してくれた学生・院生の学業増進の励みにしてもらうことです。

もう一つは、優秀作に与えられる奨学金の元である「若泉敬記念基金」という名称が示す通り、本学教授でいらしゃった若泉敬先生のご功績を記念することです。

若泉敬先生は、1966年に本学に教授として着任され、1970年12月から1980年4月までの約10年間にわたり第2代世界問題研究所長を務められました。1992年の退職時には、退職金の全額を本学に寄付され、それが「若泉敬記念基金」となった次第です。

今回は、その基金を基に懸賞論文を始めてから23回目・23年目、皆さんが生まれた頃に始まったという伝統ある懸賞論文です。

若泉先生のご功績は、ご著書『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』が有名ですが、佐藤栄作首相の密使として沖縄返還交渉にご尽力されただけでなく、本学創設当初から本学の発展に尽力された大功労者の一人です。

若泉先生は、文化の日にちなみ1984年11月3日付の地元新聞『日刊福井』に「読もう、書こう、考えよう」というエッセイを書かれています。本を読み、文章を書き、心田（しんでん）を耕す（＝考える）」ことの大切さを指摘されています。このことは、当時から現代に至るまで通底する重要な考え方であると思います。生成AIが人間並みに文章を作るようになった現代だからこそ、その言葉は、AI時代に生きる私たちが、より一層大切にかみしめなければならないと思います。

今回応募された懸賞論文は、まさに、若泉先生が推奨されています「読み、書き、考える」を実践した成果物であり、若泉先生のお言葉を借りれば、「言語能力を涵養し、想像力と創

造性を開発し、精神的貧困を克服する」ことにも繋がります。まさに、心の田んぼ、心田を耕すことになります。

世界問題研究所と同年の1966年に設立された学生団体「世界問題研究会」がありました。当時の世界問題研究会の学生さんは、直接、若泉敬先生の薫陶も受け、皆さんと同様に、真っ向から世界問題に取り組み、広く関連文献を読み漁り、真剣に論文を書かれていました。

世界問題研究会の諸先輩方が卒業後に様々な領域でご活躍されていることからわかるように、学生時代に真剣に「読み・書き・考える」体験は、卒業後の社会人としても大いなる糧や励みになったことでしょう。

今回の授賞式に、世界問題研究会会長で、学生の皆さんの約60年の先輩の本学3期生の澤野勝彦様をご出席されておられ、後にお祝いのメッセージをいただきたいと思います。

学生の皆さんは、懸賞論文に応募するために一生懸命に勉強されたことと思います。こ

の素晴らしい経験を忘れることなく、引き続き、深く思考をめぐらし文化創造の実践をこれからも続けていくことを祈念し、私の開会の挨拶といたします。

世界問題研究所長 岩本 誠吾

来賓挨拶

本日は、懸賞論文ご入賞の7名の皆様誠にありがとうございます。

本件へのチャレンジ並びに栄誉ある入賞に改めて敬意を表します。

私は、3期生で法学部出身の澤野勝彦です。今回の表彰式にお招きいただき大変嬉しく光栄に思っています。

私は、在学時には、創学期に創部された「世界問題研究会」に在籍しました。卒業後、大手メガバンクに就職し、関西・関東の営業店並びに本部に勤務。営業店長、銀行関連会社の部長を経由し、定年後は同グループ会社の



役員を歴任。現在は銀行のお取引先において顧問をしています。

省みますと世界情勢や経済動向については仕事柄日々注視が必要ですが、学生時代の部活「世界問題研究会」での取組みが幅の広い視点（例えば「世界の中での日本の立ち位置」等を見る眼）を育ててくれたのではないかとと思っています。

近年は、帝国主義時代の再来かと思われる「弱肉強食」の世界と化し地政学的リスクが増大し先が見えない状況となっています。

今回入賞された皆さまは「問題意識」を持たれ色々な課題や種々の問題に鋭意チャレンジされ入賞されたことは社会人となられた後も大いに生きてくるものと思います。

是非とも「若泉敬先生の志」と京都産業大学の「神山スピリット」を高く掲げられ今後の人生に果敢に挑戦して頂きたいと思います。

最後に、今回の入賞者の中で引き続き在学される方に誠に勝手なお願いではありますが、現在休部となっています（歴史ある）「世界問題研究会」を復活・再興していただけないかと切にお願いしたく思っています。

私共「世界問題研究会 INC（OB 会）」も微力ながら応援させていただきますので、どうか宜しくお願い致します。

今後入賞された皆さまが雄飛されご活躍されることをお祈り申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

本日はご入賞誠にありがとうございます。

世界問題研究会 INC 会長・本学 3 期生
澤野 勝彦

講評

〈全体講評〉

第 23 回目の懸賞論文に当たる今回は、国際関係学部、法学部、外国語学部そして文化学部の 4 学部から秀逸な 13 篇の応募作がありました。例年、3 年生と 4 年生の応募が多い傾向にありますが、今回は 2 年生の学生さんもチャレンジしてくれました。2 年連続で応募された学生さんも 2 名もいらっしゃいます。主催者側として、応募作品が若干減少したとはいえ、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います。

そして、「今日の世界問題」と題して応募された論文は、どれ一つ同じテーマはなく、どれも非常に重大でかつ多彩なものでした。将来を生きる現代の学生さんは、どんな問題が気になっているのか、未来社会を考える上で非常に興味深く感じました。今後とも、社会に出ても、多様な世界問題に興味関心を持ち続けて、その解決方法を考え続けてほしいと痛感しました。

これら 13 篇は、着眼点、論文構成、分析方法など、どれも学術的レベルの高い論文でありました。そのため、甲乙付け難かったですが、審査の結果、一席は該当者なし、二席に 2 篇、佳作に 5 篇が選ばれました。これら 7 篇については、後ほど個別に講評されます。なお、残念ながら入選されなかった 6 篇も非常に素晴らしい論文であったので、何らかの形で学生さんの名前と論文名をご紹介します。

蛇足ながら、今回の応募作品を読ませていただきながらふと気になったのが、生成 AI の利用方法についてです。応募作品で AI が活用されたかどうかは確認する術ありませんが、AI はあくまで情報収集の補助手段として活用するのはいいと思いますが、それを鵜呑みにしないで、必ず自分で原典に当たって再度それを確かめることが必要です。そうでないと、若泉敬先生のおっしゃる自分で「読み、書き、考える」ことにはなりません。自戒も含めて、文章を書く上で AI の利用には特に注意していただきたいと思います。これはあくまで私の杞憂です。

受賞者の皆さん、おめでとうございます。
これからも勉学に一層頑張ってください。

〈受賞作講評〉

■二席

国際関係学部国際関係学科 3 年次

杉本 芙優

「再生可能エネルギー普及・拡大をめぐるエネルギー不正義：メガソーラーをめぐる地域係争を事例に」

本論文の骨格をなすのは、「なぜ再生可能エネルギーは「正義」にかなう形で導入されていないのだろうか」という問と、これを受けた二つの仮説（Ⅰ：分配的不正義、Ⅱ：手続的不正義）の検証である。

分配的不正義については、戦後日本の電力体制の歴史的経過ならびに地域的負担の不均衡が資料を基に論じられる。手続的不正義については、岡山県でのメガソーラー開発の事業を事例として検証がなされる。いずれも綿密な資料調査に基づいた議論が展開されており、そこに含まれる問題点が一定の説得力をもって明らかにされている。また、論文全体としても、問の歴史的・社会的背景の検証となる分配的不正義の問題と、個別事例の具体的な検証を扱う手続的不正義の問題とを組み合わせることで、エネルギー不正義の問題の現状



を複合的に浮かび上がらせることに成功している。

その一方で、岡山県での事例について、事業者と地域住民グループの情報のみが参照されるにとどまっており、手続という点で自治体と地方議会の動向についても考慮の余地があったと思われる。

とはいえ、国際的・社会的にエネルギーの適正かつ確実な確保が世界的に喫緊の課題となっている現在、「エネルギー不正義」という極めて重要な主題を取り上げ、緻密な構成で問題を論じた意義は大きい。多数の資料による周到な検証と意欲的な考察が試みられており、高い評価に値する。

■二席

文化学部国際文化学科 2 年次

松井 健太

「マリア・モンテッソーリの平和論ーリソルジメント民主派の思想とカトリック信仰との関係を中心にー」

本論文は、モンテッソーリの平和論を、モンテッソーリ運動や第二次大戦といった外在的要因ではなく、リソルジメント民主派の思想とカトリック思想との内在的な関連性から解明するものである。

モンテッソーリの思想を手際よく整理したうえで、同時代の政治思想ならびに宗教思想の歴史的文脈と照らし合わせながら、説得力のある論証がなされている。また、社会的背景にまで広く目配りした叙述は、モンテッソーリの思想の深みと影響力の大きさを伝えるうえで、非常に効果的である。

その一方で、「おわりに」において、モンテッ

ソーリ運動を「平和論の生成というよりも、平和論の実践」として整理している点は、やや性急さを感じる。本論文の叙述からすると、実際には、彼女は内的な思想を前提にしつつ、現実世界での様々な活動との往還のなかで、平和論に深みを加えていったのではないだろうか。思想のそうした複雑な生成過程についても目配りがあれば、なおよかったと思われる。

とはいえ、この点は本論文の優れた価値を貶めるものではない。先行研究を踏まえたうえで、丹念なテキスト読解に基づき新たな地平を開こうとした意欲と、それを実際に一定程度成し遂げたことは、高く評価されるべきである。また、昨今の世界情勢に鑑みたとき、人間解放と愛に基づいた普遍的な人類統合とそのための教育の重要性を説くモンテッソーリの平和論は、優れた現代性をも有している。全体として、高い評価に値する論文である。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

黒川 大和

「ドイツにおける産業デジタル化政策の展開」

近年は経済的に停滞しているドイツのデジタル化政策の特徴を、EU という超国家機構の政策との関係の中に位置づけるという重要なテーマについて、手堅く分析ができています。単一市場として大きな規模を持つという優位性によって市場のあり方そのものを形成しようとしてきた EU の規制的政策を通じて、ドイツが自らの規制観によって広く世界に対して影響を及ぼそうとしてきたのだという指摘は、

非常に興味深い。ドイツは製造業における中小企業のプレゼンスが大きくデジタル化でも遅れが見られるという点で日本とも共通点がある。ドイツの産業構造とデジタル化の推進政策との関係についての考察をさらに深められていれば、日本への示唆はもっと大きくなったであろう。

■佳作

法学部法律学科 3 年次

小嶋 智廣

「ロシア制裁回避防止をめぐる国際法解釈と政策的対応——データサイエンスによる実証的分析を用いて——」

大規模な軍事衝突が頻発するなかで、ロシアによる制裁回避行動を防止するにはどうすればよいかという問いに対して、国際法学、国際関係論、データ分析の融合という野心的な試みを行った論考である。ロシアに対する経済制裁が

軍事的損失に与える影響を検証した結果から、第三国経由による貿易が損失を緩和させる強い効果を持っていることを明らかにしている点と、検証結果からの政策的含意として、制裁や輸出規制を第三国経由の貿易も含めて国際的に調整・強化する必要があるとする点は、重要である。興味深いテーマ設定と分析手法ではあったが、国際法の条文の確認やデータ分析などの検証の手続き面において甘さが見られるなど、改善の余地も見られた。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

清水 佳穂

「EU における人の自由移動とフィンランドの労働市場～国際移動の枠組みとその経済・社会的影響に関する分析～」

国際的な人口移動の動向という今日的にも非常に重要なテーマについて、EU 内の北欧型福

社国家・フィンランドを取り上げて、移民労働の現状に関するデータに基づいて構造的な課題を明らかにした論考である。具体的な論証と分かりやすい表現によって、全般的にバランスのよい研究となっている。国際的な労働移動を持続的な経済成長に結びつけていくためには、単なる労働力の確保にとどまらず、流入した人材を適切に配置して質的に向上させるべきであるという社会統合政策の必要性についての指摘は、日本も含めた EU 以外の先進資本主義諸国にも共通する重要な政策的含意である。但し、その結論に至るまでの考察部分において、より深い検討があるとよかった。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

杉 旺城

「ポピュリズムはいかにして生み出されるのか—質的比較分析を用いた十分条件の検証—」

現代の自由民主主義諸国において、ポピュリズムは多くの国で観察される現象である。そうしたポピュリズムを台頭させる十分条件は何なのかという重要な研究上の問いについて、質的比較分析からその原因のタイプを析出するという、非常に意欲的な研究である。経済的格差や社会的分断などの独立変数、つまりは原因の組み合わせのタイプごとに、どの程度自由民主主義を損なうことになっているのかを明らかにしている点と、政治的分極化が最も警戒すべき現象であることを指摘

している点は、本研究の重要な貢献である。但し、例えばモデルの紹介部分と考察部分において事例国の不一致が見られるなど、記述や分析・論証の重要な部分において粗さが散見された。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

軒端 来実

「中国の気候変動対策におけるサステナビリティ戦略の考察」

中国がクリーンエネルギー政策と気候変動政策において、「反対者」から「推進者」へと立場を変えていった現象について、利益モデル（コストと国内での正統性の観点との比較考量）と環境権威主義というモデルに基づいて解き明かすことができています。こうした中国の積極姿勢は民主主義諸国の気候変動政策が「後退」する状況下において、中国の覇権的地位の強化に資する可能性がある。その一方で、中国のクリーンエネルギー政策の裏側にある人権問題や環境負荷などの「負」の側面に対しても指摘されており、バランスも良い。中国が環境政策の持続的なリーダーになり得るのかに関する予測・評価についての考察があれば、より引き締まった論考になったと思われる。

以上

世界問題研究所長 岩本 誠吾

同研究所員 耳野 健二

同研究所員 中井 歩

〈その他の応募作〉

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

稲葉 美咲

「環境問題における AI の活用—中立性の幻想と価値の考察—」

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

上田 友津

「持続可能な世界観光の在り方—未来学的視点に基づくパラオの事例分析—」

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

清 心美

「米中覇権争いの行方～台湾を巡る対立から考える～」

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

高林 未来

「持続可能な観光産業の形成—様々なリスクに対し耐久性のある産業にしていこうために—」

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

西野 貴翔

「ヨーロッパの通商政策と対中姿勢」

■外国語学部ヨーロッパ言語学科 4 年次

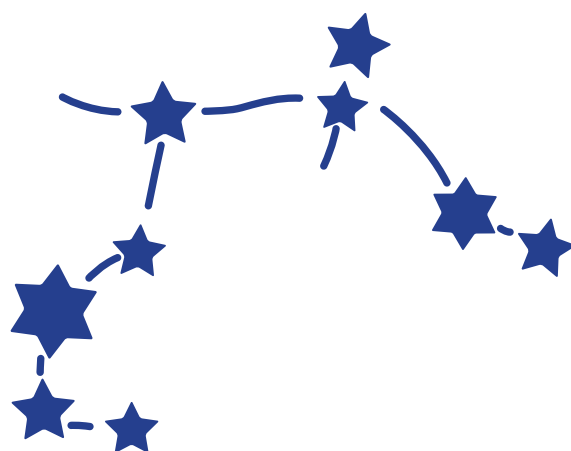
安川 知希

「スペイン語諸国（中南米）と中国の関係性について 経済安全保障の側面からの検証」

※区分ごとに氏名の 50 音順

若泉敬記念基金について

若泉 敬（わかいすみ けい 1930–1996 年）
国際政治学者。東京大学法学部を卒業し、ロンドン大学やジョンス・ホプキンス大学に留学。1966 年に本学教授として招聘され、同年世界問題研究所所員となり、1970 年から 1980 年まで同研究所所長を務める。1992 年退職時には退職金の全額を同研究所の活動資金として寄付。同研究所では 2001 年にこれを「若泉敬記念基金」と命名。若者の教育に熱心だった若泉教授の精神を学生に伝承するため、講演会開催、懸賞論文募集などの経費に充てている。



当研究所の活動やニュースレターのバックナンバーはホームページにも掲載されています。

<https://www.kyoto-su.ac.jp/research/sekaimondai/>



京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第18号 2026年9月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄、荻野 晃大／同事務局 藤本 興子

印刷 中西印刷株式会社
